



芭蕉公羽文集

四



芭蕉翁文集卷之四

銀河序

水陰通小引脚一々歌後正か雲邊
し子所小泊、彼彼後、流を流の南十八里
陰波と隔て東西之十の里小横あり
此をより、又後、海難谷の隅、と流原
自小より、身、ち、さ、や、ふ、見、つ、こ、ま、む、は、流、を、



ふらふら多物てりよまの世の實とせり
浪くたまひ目も度治めく侍とた
朝敵の類のを流せしめしりて
かそ浪しき名のゆめしりま
車小ありひく窓押きて時時の旅照と
くまんとする浪日照ふ海も流て月
月のかく浪のよそふかふるま
くと決るもふ仲の方より波の

あそく運ひて魂もこころし
ちきまきくそゆよりた
あれ枕もさきすまの
なめてあふちりふらん

荒海や他版横る

曠野序

とせ成存

尾陽を冠る檀本堂主人のちり子集と
編む名をわく野といふは自らいふ名有
事と志くは予ともうふは人いふひとせ
ひ郷小強麻也——折——の云はれり
免てあその日といふ其日新お懐とまの目
まう世たかやうたるふもや多なるま
活生のえられ氣色柳桜の輝とる集

蝶鳥乃かののりこむくたは風情ふつま
いさうつ美人とそこあふよとのほはれあや
抱乃いとくあうけりる心り——は有はきいふ
まをうりて娘百合のあふ——ははるる花
のえあふもなれくは葉の指しなまひ
道草の乃志くせんとい野のま——の
此をのともなをいふ

元禄二年所生

桃もろ

閑居箴

芭蕉翁

何れ物なきの意や日思ふ人の同母も
うもさく人よとよみく一人よも終
しとちまひひびちりなまされ
月の夜雪れりしもの友らあつても
けりや物とよしんはひびき
酒のみそくはれふひびきうも酒の
押らもてあつたあつたしんは

きりくもとよみぬてとよみく
きりくも

酒のかんせい

あつたあつた

あつたあつた

机録

芭蕉翁

向ける時を時とてかきて塔寺吹虚の
氣とまじりて志のあつともて書と紙
と心と意貫て其精神とて
静りし時を筆とて取て義素の方す
今まこのあひかきまはる一物二月と
多きくもさる一す西二尺と脚の
ほろのあつきの針と彫りて潜龍

牡馬の負小方とて毛ととりて一月と
せんや又二用とせんや

洗筆泥

洗筆泥

まは麻小をとりて洗ひて洗ひて
ありて竹丸のまをとりて洗ひて
かゝるをとりて洗ひて洗ひて

るの... 名ありは
ふあつたり... 目ふぬふとみく
おほいあはれと... 紙とす...
又... 紙とす...
... 目ふぬふとみく
... 目ふぬふとみく

吹... 目ふぬふとみく
か... 目ふぬふとみく
... 目ふぬふとみく
... 目ふぬふとみく
... 目ふぬふとみく
... 目ふぬふとみく
... 目ふぬふとみく

倭小感ももちりけりぬこひ宗祇の
時るをいそむ彼の原よりふ祇と
月こころのこゝろの妻と書る
はる

世ふぬるまら

宗祇のやとる

元右筆

くせ成存

人の短といふ事たうの候
己、長といふ事あつて

旅の云

よのこゝろ啓卷

秋の風

鼠蘭詩

芭蕉翁

今草と樽——こらしくをむくさる
去る志ありり 文筆偏り——ささる君の
いさゆ——とす 松倉鼠蘭と義と骨
實と腸ゆ——老莊と魂ふかや——風雅と
肺肝のらふらりき——じやらちし事
イとせらりまらぬるやいことを身

官と辞——て若洞小え賢の竹と志
と——老母とさひ雅のとほ——
——てい——世渡ふそ——
宗辱らるる病——す日——風雲小た
今年仲の秋中の二日由井金はた波の
松小月とそ——く海余小枝と美
ゆ——ら——ん地とや——して終
島絶ぬのあり——古七自れ東の事——

七十年の母ふんてさう七歳れ雅子
おのひとおとこしきしあひあひあひ
みすくおとこしきしあひあひあひ
押さうりても悔しうらうらうら
やまおとこしきしあひあひあひ
いふおとこしきしあひあひあひ
さうおのこしきしあひあひあひ
お母の恨しうらうらうらうら

かきしきしあひあひあひあひ
さうおのこしきしあひあひあひ
やまおとこしきしあひあひあひ
いふおとこしきしあひあひあひ
さうおのこしきしあひあひあひ
お母の恨しうらうらうらうら
かきしきしあひあひあひあひ
さうおのこしきしあひあひあひ
やまおとこしきしあひあひあひ
いふおとこしきしあひあひあひ
さうおのこしきしあひあひあひ
お母の恨しうらうらうらうら

しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ
しるしよふしるしよふしるしよふしるしよふしるしよふ

秋風小折がかりきき素の杖

都歌

とせ成翁

自得

あふとあふとのあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとのあふとあふとあふとあふとあふとあふと

題あり

あふとあふとのあふとあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとのあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

乐順傳

芭蕉翁

を人東順ハ楊氏ゆて之繼父ハ利
聖田の農士竹氏と稱す楊氏といふは
晋子ハ母方小なるとのありしとて七十歳
ありしをの杖ハ月とやある松の上
徳のく徳多の情露と懸くつるあり
かゝるハ床の月よりまて神タマシイ礼ます

終小史科乃句と形をてて大平め曲
乃意小湯る着りし時醫周とぞ申んて
恒乃音とて本多何某の公より傳録
とゆへ冬魚鮑唐の熱山くく
さきとも世路をいひて名ゆめの衣と
破り杖と拵て業と稱號示六十年の
しゝ免りし市店と山居小かて樂し
東又市とるかゝる札とさしぬ事十とせ

余りそるの生さみ車ふあふさ
湖よ生さく東野ふ紙くとき
是つりくく大源朝市の人あふ
る

入月の遊々

机乃出隅の舟

栢去舟

と浅舟

爰かしくこのかきけりさきて栢町と
いふ所小舟ふさりして陸月衣更
小舟のぬ風雅もくやそ述めて
ひととらんと出れし風情胸中
こそひて物乃りくや風雅乃魔
心りてくく栢放下く栢とを船

只百歳と云く云く杖一輪
命と惜みたりゆき風情終らぬと
みん

雲雀よりと云く

峠

石臼頭

昔年

市中小河川に俗塵小を引き進めると
市小を引く見とく山を引くとも
汝をとらる事ハく高山竹林乃
猶古く朽もくばく寛平花心の
と見し終りきく

是と見ると只石臼乃のたき

玉師ハ是とありて肉力と書きハは
ある民は務り又麦刈初るは
叔のちかきに力ふしあるを
余亦よしと申す
薄は色し役、優婆塞乃、居の中
かされて彼をくひとみちを
上小立居しと下とゆふは
りつと申す

向きしなりあり古事なり
外とんぬる謙小居る事、潤く
小つとすやかりあり、美婦の
とくきし事、のりつと申す
ふくくつとあり、目あり
時をかまひと擔ふを、舟の
くつとあり、後か子れ
相と極よくとあり

ゆきむし遊人きりきと石白やゆきむ
遊人いふまゝ人の心とよむるの
むりあはすや月さのほろ夕影の
法不立とりのたよ流の短夜とよむる
ひとりを佛のまの心とよむる大雲あり
あそくをいふとそんと悦まるとん
らういふと尻とあそくくらむと文王の
あそぶとくらむとあそぶとあそぶと
いま旅のむつとあそぶとあそぶと
あそぶとあそぶとあそぶとあそぶと
あそぶとあそぶとあそぶとあそぶと
あそぶとあそぶとあそぶとあそぶと
あそぶとあそぶとあそぶとあそぶと

西のよ八像候

と世に存

しそをそくし方ハたむいものこも

高のある日ち

こみくしそあきなるぬき

日ちうしきたせしき

卒兜婆小所替

しそに存

いふをきりし 葦も音し 葦も音し

いづきの人か かしらば かしらなる人

写しそ 宛てし 子殿のま ぬき

今度小現し ときか ちらなる時

あきし ひとま じき 小し かん 葦も

きりし じき 小し かん

きりし じき 小し かん

杵折贅

首首尾

は杵の折しと名をふるものゝ上りこふ
りこをあるひ目出あみさ技糸乃
弁物とありき事仕うれのあら生
何とら里乃緩う碓のからうと成や
首を横樵より今を記入とゆ
も人改よの具小名と改とい

人まゝかこのこしるゝ居て
色しすむきく小あひの
かゝあ只世の中横樵

い樵乃

ひー樵

樵れあ

勺合渡

續不集

芭蕉

一柳形石トのぬいし身と整境不流ひ
 せりりく心きく名雲のり山けり
 とぬりりあきさきし野不流を
 ぬの湖水の月小燈籠と一かて風雅
 乃中月ととりし事〇年たしきよりし集のぬくしひ不乃
 之をも春秋をく雨さけらぬりた

して東の籠の菊より影とさむく
 唐紙乃牡丹も花去之け景かた梅の
 侘梅の真とれ小ふき附ふもく
 句と又人とぬきしむけくさるる
 柿小今く花の点りきよむふつら
 是のさる本れ葉と拾ひて花在り
 りつらて揚て田舎とけす判世
 うさり小乞てふとこしよ

海とや樂よるる〜
めとむふ何ありといらんそれと
馬路の目とぬひ鶴鶴の目と戸
〜んを何とて自ら享知の〜
〜と何とて何とて終る芭蕉庵
書表のと何〜

中

一 諸禮停止

一 出合遠近

但聲先

一一句一也

雪月苑一句

右之ヶ條舊式也

芭蕉庵極書々々
中

新脚提

乙巻紙

一 一名再着すくすすらるる免さる
葉とありし由

一 腰よ寸鉄をくくとも帯は危うしに
あつたの今と及事なつて若
又の籠りるものち門が小鉄
いしつらふよぬの御おのり

あれは

一 衣は志城おぬ小は
あすは

一 負馬駄の肉ぬんてくあぬす
負食好味ふあもる人を地事
あきやあきよものへ葉根と交へ
百重とけすしは仲とあふ
一人の求りさ小己う白おのり

筆をとりてしるす

一 多岐の嶮岨の境をめぐりて系不而方
念記しし處をす起しし中途

より帰る

一 馬が不承事ありて一校の枯枝と
こり積肺と云ふ

一 物て酒と飲食ししに飲食過りし
因縁ししことも微塵ありて

止りし一札不及尺の言幽札記果の
戒ゆるに依りて目も碎と懐ん
てかりしにささるるの刻あり

はしりし也

一 船後茶代忘るるに

一 地乃鏡とありて已り長と取し事
けりし人と侍て己りしに
後しとあり

一 俗語の弁難話と云うす 新伝本
 なくし 俗語とて考と云ふなり
 一 女性の俗言ふと云ふ 一 もるうす
 師ありて其のめとらぬ事なり けり
 親友せし人と云ふ 俗言なり 想ら
 男女の通ハ嗣と云ふのこなり 流蕩
 中きし心敷一なり 其通ハ一
 公通なりとてぬに能くと首一

一 主なりと云ふ 一 針一針なりと云ふ
 取らぬす 山に山はと云ふ 動なり
 一 山川田畑と云ふ 一 入るなりと云ふ
 ぬの名と云ふ 一 夏なりと云ふ
 一 字の乃脚思ありて 考と云ふなり
 一 句の物と云ふ 一 解せぬ人の脚と云ふ
 事なり 人ふ教ふことと云ふ
 後のことなり

一 一着一徹の身もむ後々々ふふふ
うううううううううううううううう
かひの心を世のぬりうううううう
け道不交ううう
一 夕をふひ且とふうう 日暮の
け柳うううううううううう
んふそをううううううううう
まをうううううううううう

以上

吊初秋七日の皇文 芭蕉

元禄六文月七日の秋風を夫ふみらぬ
鍛所乃屋をむうううううううう
一葉権と吹け存氣知二星ううう

先子之——今春日行ふと人々皆
一蛇かきり流るれり。編船由所り
おとけしる人何り。是およりては二首
と探る。向早の心とけしる人々

小町うさ

ささくも星も旅情も春のよき春

海船うさ

七夕心かき流るる——旅情も春のよき春

白髪うさ

長髪うさ

俊もあ月の世よしの旅情も春のよき春
ゆふふとせの目しる旅情も春のよき春
萱草も霜かき流るる旅情も春のよき春
りあう——何事も首みえかりり
も——の旅情も春のよき春

はさけるる命なりとのこひあはるる
ともさへしあはるる手袋とるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる

一家のなれは杖小志の影の

墓の山

船風弦の号 芭蕉を人

風弦を奏る小あはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるる

茂命の遠く歩み荒草を方丈を他の
地よりよものちりり土器地を極く余
天とらへる日月のあまふ雲門と部く
くしりあそむ御塔を長めして百景
千変の詩人も句とほくせいの寸土
文人のまことこころ画工も筆をたふる
若顔始射の山の神人ありて

詩と能せんやい能とよくせんを

雲霧乃時百景と

若

はくしり

姨捨山の記

姨捨乃月らん事一志と下りけり
るれを八月十日更濃のふとあらたき

日没しきまにれい雲小出る香に
る花にみゆきまをひくはしりか
里小りし山を八幡とらふまより一里
斗南小西南小横あり砂を流し
ふくしつしは色くしき名ある
んくひあそきぬる山の姿く
かくぬん〇しと云らんしとら
ふしきそらし船小りししは人

ふりてし人と旗をんとあふ
いそ田舎とみぬれし

竹を姨ひきりあく
月比友
翁

常門と信の月

何人の名もなしと云はれりしるふまよ
出づるも一かき年をわらわの心
るるもとちりし花をきこく地穂の梅の
是りんあつしつと隣の花め
らりしつとく具りし心め
ゆんせ

之

田中ふゆて梅くまを地穂

義と守り事唐かふ人 翁

只と思ふは深は乃とせよ 暮

蔵書

代々世傳と人々も古跡をいふま
かゝる世のふちの母の情をいふ
そこのまゝに思ふをいふ事いふ
てよむのこゝのまゝに思ふをいふ
いふまゝに思ふをいふ事いふ
いふまゝに思ふをいふ事いふ
いふまゝに思ふをいふ事いふ
いふまゝに思ふをいふ事いふ

信濃の山中に生る竹又母のいふ
いふまゝに思ふをいふ事いふ
いふまゝに思ふをいふ事いふ
いふまゝに思ふをいふ事いふ

古跡や跡乃緒ふり
存

いふまゝに思ふをいふ事いふ

かろろと馬か完小鞍骨とよの筋靴を
うきて能くお所と画く章者乃
破子あけきうりまきしよ生前たなあれ
けしきち花ひよしならんやかの器籠と
梳りて使ふ夏現とりくくたを
只い生あそ志気さきまのなり

稲妻や顔ろと二夜

房の娘

年

卯月の中は江戸の浦一思をりしうの
しきまきあはこしあらしそ月をこし

お月夜あそび春の名残をいそぎに
只昔浦へ内をたもとむのとき
事いあやうはなすのきこぬ
氣をたふそむ

昔をいそぎ

あやうはなす

着

頃への月

後河内国へ入る

後河内やあそびをいそぎ

あそびをいそぎ

六月のあそびをいそぎ

大井川を氷出のりいそぎ

鶴岡ふとりのりいそぎ

はらとりのりいそぎ

ちんちんしんちんあつて

りふりふけ

いふふのつとあつて大井川

いふふふふふふふふ

いふふ

いふ

いふふふふふふふふ

いふ

えんせつと月日と海と見とまるとりて

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふ

藤中将実方此塚と道と一里

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

いふふふふ

いふふふふふふ

いふ

昔里と見ゆに中事いづく院の御門
の母のなまの地行るふちりてほく真
とらふし早人のかたしつ作るとしりき
乃ゆみふ書とて免つるもあつす
ゆれもといともかしくそえく作ら
まふ

梅はさかぬよの葉はのこ保の里

いづく院の御門

いづく院

いづく院

いづく院

いづく院

苗地ある人附句ありはりし中
言ふ言ふ中極評る事其の
世評言味難弁信く四月を
貴文しゆりて首級初を
く下以東武小ひりめて思
は度い

其附句

其の難小言を相りか
言乃指ると其の御座と
二月と陰
とを成

石岡原

近書

其蝶物見成人の附句も
今も信く思評る事其の御座と

落中よりたれ乃終念乃進をと下階下宿
去以去と京にしま 古筆一枚おれ
い切京中きし人々所行の依とて
少内之れをい何れと御とて
弟者不貴又少とて分致しおかに
いふとせりはよむ花流小云徳免て
思のこ柄小はたふ

其古筆

菜菔集 卷七 春 借歌

菜菔のほりふ菜菔は花とを徳免て
花乃花と花乃花屋の物とて
本領とて介乃花をいふ

二月下陰 本局

芭蕉板

祢史の詞

杭野のいねとやあつち所小あつち

乃白牝群感之奇に望ん流夢人ありと
中し柳しりもく彼方の心と清んぬふは
富え中も何れ遊める人二方道とけり
所中して空を夜車いりしなると鳴れ
神聖にたむく者くする志とる花の
古と一西人の心と心と心と清くは日後
書りしとてそとて還らぬ言ひのみら
知るる人を定むる心と柳しり夢人

んんを史書附きし日を業一毫乃
遠き所を定むる心と

自讀の詞

詩

古性達人花小振りしりし日は心を
中を心とせり地と草小草をとりけり
一物別を附分て高階未解れ他者
いふと似せし古性人々も未だ一
の指いりきの時、牡丹もあて芭蕉の

もはく破きんその一句一生是の
なまのこゝもいと書くうち鼻さく
かいらの肩のらりりゆめをいすれ
あふえん

雨雲林 此瀆

活の糸門雨雲林の像もやあらん
のちよぬらひもつは即ち向く

潜せよとやられれ君は字年余り
やうゆわれいふも夜中やとる
とらふさきいふも痛きをひせ

いら〜むも秋と
いひ〜よ秋のくれ

加賀一美珠

一美とらふもあはれぬ夜のちの〜

早世の心は... 且て... 借

海に初る我を

舟に舟の舟

